こぶしも懐かしくなりました

倉谷ちとし
広島県・五九・公務員

花一輪、咲くごとに互いの年齢を重ねてきましたね。ほろほろと春が舞うように、切なさも哀しみも心の奥に封じこめて、深い思いのままに生きてきたような気がいたします。

四年ぶりの再会がそうさせるのでしょうか。梓川（あずさがわ）のせゝらぎに、身を乗りだしながら、清い水の流れにすべてを投げ出して、封じこめてきた秘かな思いを解き放してやりたい……そんな情に駆られてしまうのでした。けれども、神神しくそびえ立つ北アルプスの山姿は、激しい心をいましめるように気高く、わたし達を見下ろしています。

七〇年代、新しい時代を求めて闘ってきた男と女。腕を組み、語り合い、魂をよせ合いながら、けな気に生きてきたわたし達の歳月を、上高地（かみこうち）の清列な水の音に重ね合せてしまうのは、わたしだけの感傷でしょうか。女が人間らしく働きつづけるために、立ちはだかる多くの壁と真向かいながら、なんと沢山のことを学んだことでしょう。あなたがいつも支えてくれたことが、今こうして肩を並べて歩くときも思いおこされて、静かでやさしい気持ちにさせられてしまうのです。

数年に一度の逢瀬のなかで、現実の競争社会でジレンマに陥っている心を、解きほぐすかのように、わたし達はお互いの存在を大切にしてきましたよね。三〇数年間、生活の営みのありようは違ってはいても、終りのない恋を慈しみながら、残りの人生を生きていくのだと思います。私は、間もなく還暦を迎えますが、何んとも不思議な面持ちでいっぱいです。遠い昔、社会や職場の不自然さと闘いながら、お腹の底に握りしめていた「こぶし」も、ひたむきに生きているうちに、懐かしいものになってしまいました。春の風のようにおんなの姿態をまろやかに、のびやかに生きてみたい――と願った時代、あなたに出会えたことを幸福に感じております。ありがとう！

届くことのない手紙の封をしながらも、私の胸はときめいております。